



フォトジャーナリスト

安田 菜津紀さん

2021 年最初のインタビューは、報道番組のコメンテーターとしてもご活躍のフォトジャーナリスト安田菜津紀さんに、難民、東日本大震災、ヘイトスピーチ、コロナ禍などの問題について、お話を伺いました。差別や排除ではなく、共感や共生を大切にしていこうという姿勢の一貫性に、清々しさを感じつつ、様々な考えるヒントをいただいたように思います。最後の「夢」のお話は、ズシンと心に響きました。

聞き手・構成：伊藤 敬史

—— フォトジャーナリストになられた経緯を教えてください。

2003年、私が高校2年生の時に、NPO法人国境なき子どもたちの「友情のレポーター」という企画で、カンボジアに派遣していただきました。そこで、貧困や人身売買の問題が自分と同世代の子どもたちに降りかかっているのを目の当たりにして、それまで遠い国の大変な問題というように輪郭がぼやけていたものが、自分の友達が抱えている問題というふうに一気に心の距離が縮まり、自分に何ができるだろうと考え始めました。高校生なので、できることは限られていましたが、カンボジアで感じてきたことを、たくさんの人たちとシェアしようと思い、伝える活動を始めました。

最初はノウハウがよくわからなかったのですが、いろいろな新聞社や雑誌社に記事を書かせてほしいとお願いして、岩波の『世界』という雑誌に書かせていただきました。ただ、同世代に伝えるには少しハードルが高いなとも思いました。

その頃、教室で仲のいい友達にカンボジアの写真を見せて話していたら、「どこに行ったの？」みたいな感じで、普段ほとんど話したことがないような友達まで話しかけてきました。それで、写真は関心の最初の扉を開いてくれるのだと気づき、自分がやりたいのはこういうことかもしれないと思いました。

—— 人身売買や貧困はとても重い問題だと思いますが、どういう思いで伝えようとなさっているのですか。

取材は、時間をいただいて、言葉をいただいてということで、すべていただきものだと思うんですね。なおかつ人身売買で売られた先でひどい虐待を受けたときの記憶などを、私が聞くことによって、呼び起こしてしまうわけです。言ってみれば、心にできかかっていたかさぶたを、引きはがしてしまうようなものですよね。だから、そうまでして言葉をいただき、経験を分かち合ってくれたものに対して、せめて何かお返しをしなければという思いで伝えています。

—— 世界のいろいろなところで取材をされていますが、印象的なエピソードをご紹介いただけますか。

大学生の時から、中東地域に通うようになりました。

当時、あしなが育英会が、いろいろな背景で親を亡くした子たちを世界から日本に招いて交流キャンプをする企画をしていて、大学時代、そこにボランティアとして携わっていました。その中で私が一番仲良くなったのが、イラクから来た、同世代の青年でした。

2007年当時は、イラク戦争後の混乱の收拾がつかなくて、都市によっては、戦争直後よりも治安が悪化していました。彼は、イラク第2の都市モスルの出身で、治安が悪化してきたので、当時は治安が安定していた隣国のシリアに安全を求めて逃れるという連絡

が来ました。私も、シリアであれば、当時はたくさんの観光客も来ているし、会いに行けるとあって、現地に赴いたのが、シリアやイラクとの出会いでした。

ところが、安全を求めて逃れたはずのシリアが、2011年から戦争状態に陥って、もうシリアには入れないということで、彼はイラクのモスルに戻りました。でも、そのわずか3年後の2014年には、今度は過激派勢力の「イスラム国」がモスルに攻めてきて占領して、彼は着の身着のまま逃げて、今ではイラクの北部の違う町にいます。

その彼が言ったことで印象的だったのが、「菜津紀、知っているか。戦争が始まってしまえば、自分たちはチェスの駒になっていく。チェスは、駒ばかりが傷ついていって、動かす人間は絶対に傷つかないんだ」ということでした。まさに、その言葉通りのことが、起き続けているわけですね。でも彼らの誰一人としてチェスの駒ではないので、血の通った人間の話伝えなければいけないと感じます。

—— そういう中東の厳しい状況と、日本の社会とは、かなりギャップがあるのかなと思います。そういうことを日本に伝えていく上でお感じになることはありますか。

中東地域で起きていることは、遠い国の問題と捉えられがちですが、日本の中にも、いろいろな紛争や迫害から命からがら逃れてきて難民申請をしている人がいます。私たちのすぐ隣にそういう人たちがいるということも伝えるように心がけていますが、日本の難民申請に対する窓口はあまりにも狭いし、現地の感覚と日本の難民申請制度の乖離も感じます。

私が取材したシリア難民のケースは、難民認定されずに裁判までしましたけれども、裁判所の判断としては、あなたがデモに参加したのは分かったけれども、あなたが迫害を受けたという客観的な証拠がないということでした。

客観的な証拠というのは、逮捕状や起訴状を指すと思いますが、現地で取材をしてみると、突然何の理由もなく拘束をされて刑務所で拷問を受けたという話を、いろいろなところで聞きます。自分の親族が突然連行されて、遺体で帰ってきたという話もあります。逮捕状とか起訴状がなく、闇に葬られてしまうような連行があるわけです。そういう闇に葬られがちな迫害こそ、難民の方々が恐れて、逃れてきた出来事のは

ずですよ。それは現地にいれば感じることなんですけれども、日本では、客観的な証拠はないですねと、その人が証明できるはずのない証明を課していく。このギャップを、現地の声を伝えることによって、多くの人たちに気がついてほしいです。

—— 東日本大震災についても取材をされて、いろいろな発信をされていますね。

東日本大震災当時、岩手県の陸前高田市に夫の両親が暮らしていました。県立病院に勤めていた義父は、病院の4階で首まで津波につかりながらも一命を取り留めましたが、義母は、残念ながら津波に巻き込まれて亡くなりました。最初は、そういう家族の縁で通い始めました。

中東と日本をつなぐヒントをいただいたのも、実は陸前高田でした。陸前高田の仮設住宅で、ある時、私が、シリアの避難生活で凍死してしまう子どもたちの話をしました。そうしたら、まだ避難生活を送っている方々が、仮設住宅中に呼びかけて、お子さん、お孫さんが大きくなって使わなくなった服を、「シリアの人たちが無事に冬越えできますように」と段ボール10箱分以上集めてくださりました。

仮設住宅の自治会長は、「自分たちは世界中からの支援で、少しずつ日常を取り戻してきたから、今回はその恩返しというよりも、恩送りをしたいんだ」と話してくださいました。

紛争とか貧困問題に対する国際協力というと、何かをしてあげるというふうになら下目線で語られがちですけど、自分たちが受けたサポートを今度は誰かに送っていくという、恩送りの連鎖なんだということをごく自然にやってくださったのが陸前高田の仮設住宅の方々でした。

—— 東日本大震災の時は、逆に、日本にいる難民の方々が被災地に行ってボランティアをしたということも、報道されていましたね。

ありましたね。難民の方々も当事者の意識を持って陸前高田にも来てくださっていたというのを後から知りました。いろいろな境界線を越えて手を携えるという経験を、私たちはあそこで積んだのかなと思います。

—— 安田さんは、難民問題や貧困問題以外にも、様々な社会的な課題について発信をされていますが、特に今関心の高い社会的な課題についてお聞かせいただけますか。

今特に取材で携わっているのが、ヘイトスピーチの問題です。

私の父は在日コリアンでしたが、私が中学2年生の時に父が亡くなるまで、私は全くそのことを知らず、父にどんな親族がいるのかも知らないまま育ちました。カンボジアに行くことになり、パスポートの申請のために戸籍を取って、父の欄に韓国籍と記載されているのを見て、びっくりしました。

私には13歳年上の異母兄がいて、兄の母は私が生まれる前に亡くなったのですが、父と兄の母は未婚で、父は兄のことを認知していませんでした。戸籍を見たときはなぜと思いました。

でも、どうして父が自分のルーツを隠していたのかを調べていくと、1985年に改正された国籍法の問題に当たるんです。私は、1987年生まれなので、生まれた時に届出をして日本国籍ですが、兄が生まれた当時は、父親の国籍になる時代でした。父は、兄が韓国籍の子どもとして生まれるのか、未婚の子として生まれるのかの選択をしなかったらならなかったんですね。未婚の子だと、就職差別も問題になったと思います。それでも、両者を天秤にかけた時に、父は、より幸せに生きるためには日本国籍で生まれた方がいいと考えたということです。

—— 重い選択ですね。

子どものために愛情を持ってきた父が、なぜ自分の出自を隠そうとしたんだろう、どうして兄が韓国籍として生まれるという選択をできなかったんだろうと考えたときに、ヘイトスピーチの問題にいき当たりました。

京都朝鮮学校が2009年に在特会に襲撃された件では、生きるに値しないかのような言葉が学校関係者や子どもたちに投げつけられました。3回の襲撃の後に彼らが矛先を向けたのは、在日コリアンの高齢者施設でした。子どもたちの次は高齢者、より声を上げにくい人たちにエスカレートして矛先が向きました。

当時浮き彫りになったのが、彼らを法的に守れる体制が日本の中では脆弱だということでした。朝鮮学校への襲撃に関しては名誉棄損というのが難しく、侮辱罪になりました。でもああいう言葉向け

れた人たちにとっては、ただの悪口のレベルを超えていて、自分たちの存在意義を根底から揺るがし、魂を傷つけられ、強迫の言葉もたくさんあったので、直接的な脅威になったわけです。

川崎市で導入されたヘイトスピーチ禁止条例はこれから試行錯誤を経てブラッシュアップをされていくと思いますが、現に言葉のナイフを突き付けられている人たちを守る何かしらの法的な仕組みは必要だと思います。

ただ、法律単独で守るだけではなく、例えば在日コリアンがどうして日本に暮らしているのかという歴史教育や、人権を守って何だろうという人権教育を徹底して、どうしてそういう法体制が必要なのかを理解するための土台づくりも行っていかなければならないと感じます。

—— 司法的救済という点では弁護士の役割もあると思いますが、司法とか弁護士の在り方について感じていらっしゃることはありますか。

ヘイトスピーチの問題や入管をめぐる人権侵害の問題で深く携わっている弁護士さんたちが日々奔走する姿を見てきましたが、被収容者の方々やヘイトスピーチの矛先を向けられる方々は、必ずしも資金が潤沢にあるわけではないですね。社会的にとっても大切な問題のはずなのに、問題を抱えている当事者の方々、あるいはそれを弁護する弁護士さんたちを支える仕組みは、日本ではまだまだ不十分だなと感じます。

日本でもようやくCALL4が公共訴訟のためのプラットフォームを作りましたが、やっぱり弁護士さんたちが時間と身を削って公共訴訟をやらなければならないというのは不健全だと思います。なぜかという、密室で虐待を受けているのを社会が許しているのかとか、ヘイトスピーチは誰しもが被害者になったり加害者になったりする可能性があるというふうに、個別の訴訟も広く社会の問題なわけですね。

公共訴訟に限らずもっと広い形で支えるようなプラットフォームができてもいいのかもしれないですし、その基盤づくりが必要だと感じます。

—— 安田さんは、NPO法人Dialogue for People (D4P)という団体を立ち上げて活動されていますけれども、この団体についてご紹介いただけますか。

D4Pは、2019年10月にNPO法人として正式にスタートしました。

活動としては、私たちの取材、発信活動がメインで、国内外でいろいろな取材をしながら自分たちのサイトで記事を発信しています。あとは、次世代の発信者が育っていけるような場をつくるために、「東北スタディツアー」といって高校生を対象に東北と一緒に巡って取材をする企画や、「友情のレポーター」という私が初めてカンボジアに行った事業を国境なき子どもたちと共同で行うことも、重要な事業の一つです。

私たちの活動は、サポーターの方々のご寄付によって成り立っていますが、寄付とかサポートを通して、私たちが伝えている問題に対してより心の距離を縮めてほしいと考えています。

—— コロナ禍での状況について、お感じになっていることはありますか。

このコロナ禍で、感染予防という名目で排除がなされていると感じます。街角のお店が「ジャパニーズオンリー」という札を掲げてしまうことに始まり、留学生たちへの給付金に成績要件が入った問題もありました。奨学金ではなく、命を守るためのお金に数字で線引きをする妥当性はないと思います。コロナ禍で不安や恐怖に駆られる状況はありますが、それは差別や排除をしていいという免罪符にはなりません。

でも、政府の側から医療者に対する差別をやめてくださいとか、感染者に対する差別はよくないという発信はあったけれども、多様なルーツの人たちに対する差別が起きているという発信はとても少なかった。むしろ、さいたま市がマスクの配布先から朝鮮学校を除外したり、仮放免の人たちを給付金の対象外にしたりということ、公の機関が排除を率先してやってしまったところがあって、そうすると市民の中で起きている排除や差別にお墨付きを与えてしまうんですよ。政府が取るべき対応は、人権の面から見ても、感染予防の面から見ても、そういう排除ではなかったはずだと感じます。

—— 今後の夢をお聞かせいただけますか。

私の大きな夢は、この社会で自分のルーツを理不尽に隠さなければならないことがなく、どんなルーツを持っていようと、どんなセクシャリティの人であろう



Dialogue for People



境界線を越えた

平和な世界を目指して

佐藤慧・安田菜津紀が役員を務めるNPO法人 Dialogue for People
では、伝える活動を通じてさまざまな社会課題に光をあて、共に生きていくための「対話」をうみだすきっかけを創出します。

ウェブサイト・SNS・YouTubeにて情報発信中！

Dialogue for People

検索






<https://d4p.world>

とも、自然とその場にいられる状況を築いていきたいということです。

私が幼い頃に父に絵本を読んでとお願いしたときに、父は文字をすらすら読めませんでした。それは在日コリアンだからというだけではなく、教育が十分に受けられなかったという背景があったようですが、幼い私にはそれが分からなかった。父の背景やルーツを全然知らなかったのも、「もうお父さんに絵本を読んでもらわなくていい、お父さん日本人じゃないみたい」と怒ってしまったことがありました。それがどんなに残酷な言葉だったのかを、当時の私は知りませんでした。彼のルーツを知って、今だったら、絵本の読み聞かせをしてもらって、しどろもどろの日本語でも、これが父の言葉だと喜んで受け入れるのにとすごく後悔をしています。

だから、父のように家族にさえ自分のルーツを隠さなければならないような状況を変えて、お互いがどんなルーツを持っていようとリスpektし合えるような社会を目指して、取材と発信活動を続けていきたいと思っています。

プロフィール やすだ・なつき

1987年神奈川県生まれ。NPO法人 Dialogue for People (ダイアログフォーピープル/D4P) 所属フォトジャーナリスト。同団体の副代表。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に『写真で伝える仕事—世界の子もたちと向き合って—』(日本写真企画)、他。上智大学卒。現在、TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演中。